２０１７年度 第４回

郵博 特別切手コレクション展

記念特殊切手コレクション展

展示作品解説パンフレット

主催

郵政博物館、特定非営利活動法人郵趣振興協会

展示団体

記念特殊切手研究会

後援：無料世界切手カタログ・スタンペディア株式会社

開催日時

2017 年 10 月 7 日（土）13:00-17:30

2017 年 10 月 8 日（日）10:00-17:30

2017 年 10 月 9 日（月）10:00-17:30

会場：郵政博物館

展示作品一覧

カッコ内の数字は展示フレーム数です

記念切手に見る日本戦後史 - 日本国憲法施行から大阪万博まで -（4）大久保幸夫
記念切手発行の歴史を辿ることで戦後日本史を辿る。切手＋関係資料＋写真で紹介。

第 1 次国立公園（戦前）- 発売局使用例 -（5）池田駿介
発売制限方式が取られた戦前の国立公園切手の使用例を単片・エンタイアを用いて展示。

第 1 次国立公園（戦後）- 発行面と使用例 -（5）神宝浩
第1次国立公園のうち戦後発行分を展示。各種使用例を中心に、発行関連のマテリアルも適宜取り上げた。

国際文通週間 1958-1969　～廣重と北斎～（2）神田明彦
安藤廣重と葛飾北斎を図案に採用した初期国際文通週間 12 種について、どのように図案化されたのかを見るとともに、実逓使用例を示した。

東京オリンピック（3）神田明彦
1964 年オリンピック東京大会の開催準備～実施までの出来事について、実逓使用例を中心とした郵趣アイテムと他の資料も交えて構成している。

書状 50 円時代の記念切手 1976-1980（3）吉田敬
1976-80 年に発行された記念切手を使用例中心に展開した抜粋コレクション。

昭和 30 年代記念特殊切手の製造面要素　- 目打型式とグラビアスクリーン -（5）永吉秀夫
工業技術の著しい発展期に登場した記念特殊切手の製造面バラエティを紹介する。記念切手は製造面も面白い。

昭和 30 年代記念特殊切手の製造面要素　- 定常変種と目打型式による窓口シートの分類 -（4）横山裕三
各切手の窓口シートは、定常変種と目打型式によって4面に分類できることを一部の切手から抜粋して示す。

年賀切手 1936-1971（5）水谷行秀
年賀切手を旧来の手法でまとめた作品。単片でも小型シートの特徴が現れているものを示した。

ふるさと切手　花　62 円（4）斎　享
日本の消印の中で最大のバラエティの時期に発行されたふるさと切手花 62 円を満月消印で表現。

記念切手に見る戦後日本史ー日本国憲法施行から大阪万博までー（4）　大久保 幸夫

記念切手はその時々の出来事を映しています。特に戦後発行された記念切手は第２次世界大戦の敗戦から復興し、高度経済成長へと歩んでいく姿を見事に辿って見せてくれます。

この展示では、そのような記念切手をピックアップし、1947 年の日本国憲法施行から 1970 年の大阪万国博覧会までを当時の様子を伝える関連印刷物や写真とともにご紹介してゆきます。

切手収集家の方々には記念切手の新しいコレクションの姿を、切手には詳しくないという方々にはちょっと変わった歴史資料としてご覧いただけるのではないかと思います。

画像は、原爆を投下された広島・長崎の法的支援を記念する切手。

第１次国立公園（戦前）- 発売局使用例 -（5）　　池田 駿介

戦前の国立公園切手は、1936 年～ 1941 年にかけて、第一次富士箱根、日光、大山・瀬戸内海、阿蘇、大雪山、霧島、大屯・新高阿里山、次高タロコの８シリーズが発行された。

その主な発行目的は、風光明媚な我が国の国立公園を紹介することにより外国人観光客を誘致し、外貨を獲得することであった。そのため、一般国民向けとはせず、発売局制限方式が取られた。具体的には、発売局は、①国立公園の地元局、②逓信局所在地の一等局（札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本）、③外国航路船内局（北米航路、欧州航路、上海航路）、④外国航路寄港局（横浜、神戸、門司、長崎、後に敦賀、新潟を追加）、⑤ホテル内局（帝国ホテル、山王ホテル）、⑥外国人保養地局（軽井沢、雲仙）、である。

その他、国内外での宣伝のため、新宿伊勢丹に開設された四谷臨時局で第一次富士箱根が、米国の万国博覧会（サンフランシスコ、ニューヨーク）で日光、大山・瀬戸内海、阿蘇の各シートが臨時的に販売された。本展示では、これらの発売局の状況について単片とエンタイアの使用例を用いて示している。

この画像は、一次富士箱根地元発売局使用例、箱根宮ノ下（料金 10 銭、S12.4.1 料金改定）－富士屋ホテルのはがきを用いたスイス宛外信便－

第１次国立公園（戦後）- 発行面と使用例 -（5）　神宝 浩

第１次国立公園切手は戦前、戦後にわたって発行されていますが、この展示は、そのうちの戦後発行分（１３公園。切手３８種と小型シート）について、発行面と使用例を示したものです。

従来伝統郵趣においては、一般に製造面と使用面という２つの切り口で収集が行われてきました。これに対して、「発行面」というのは、切手の一生が“製造→発行→使用”という３つの局面を経ていることに注目し、とくに発行にまつわるマテリアルを独立して取り上げて、これを伝統郵趣の収集の中に位置づけようとするものです。

この展示では、発行面の中味として、①発行事情（発行の背景など）を物語るマテリアル、②切手と同図案の風景印、③切手発行にちなむ行事の小型印、の３つを取り上げました。

一方、使用例については、その切手が当初の発行目的どおり使用されたいわゆる適正使用例のほか、郵趣的に面白いと思われる多数貼りや珍しい使用例などを織り込んで展示しました。

分量的には使用例のページが多くなっていますが、新しい切り口として発行面にも注目していただければ幸いです。

画像は、「富士箱根」小型シートのうち 14 円、24 円の部分を切抜き、国内書留書状に使用したもの。 切手額面の合計は 38 円で、郵便料金（書状８円＋書留 30 円＝ 38 円）に一致しています。

国際文通週間　1958-1969　～廣重と北斎～（2）　　神田 明彦

1958(昭和 33) 年、第 2 回国際文通週間を記念して安藤廣重の「東海道五十三次　京師」を図案とした切手が発行され、以後現在まで毎年 10 月に発行されています。

最初の 12 年間は「東海道五十三次」5 種と、葛飾北斎の「富嶽三十六景」7 種が図案に採用されました。

本作品は、これら 12 種について、原図を再現したポストカードと切手を並べて、どのように図案化されたのかを見るとともに、実逓使用済・使用例を示しました。

昭和 30 ～ 40 年代に発行された東京オリンピック切手や国際文通週間切手は折からの切手ブームの中、大半が未使用のまま保存され、発行当時に実際に郵便に使われたものは貴重です。

東京オリンピック（3）　　神田 明彦

1964（昭和 39）年に開催された東京オリンピックは大成功に終わり、日本の戦後復興を世界にアピールしました。

本作品は、幻に終わった 1940 年東京オリンピック、1964 年東京大会の招致活動・募金活動・開催に向けたインフラ整備・聖火リレー・開会式～閉会式、関連イベント、1964 年東京パラリンピック、そして 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催などの出来事について、オリンピック切手の実逓使用例を中心としたアイテムと当時の非郵趣資料も交えて構成しています。

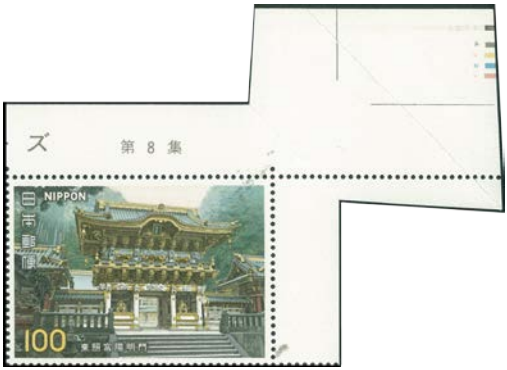
画像は、寄付金付き切手のオリンピック選手村局使用例。

書状５０円時代の記念切手 1976-1980（3）　吉田 敬

書状料金 50 円・葉書 20 円時代に発行された記念切手 162 種を満月印や使用例を中心に展開した抜粋コレクションです。私（＝展示者）は、これらの切手が発行された 1976-1980 年に小学生でした。クラスの男子生徒の半分以上が興味を持つほど当時の切手集めは流行していました。今思うと周りが集めているから集めた子も多く、一年以上熱心に収集をしていた子はほんの一握りほどしかいなかったのではないかと思います。

そのような中、幸いにも切手収集の楽しみを深く知ることができた私は、記念切手が発行されるたびに、学校から帰るとお小遣い（小 4 で 400 円）を握りしめて、新切手を買いに行ったものです。予算的に買えるのは一枚か二枚。額面１００円の国際文通週間切手については、とても買うことはできず、ポスターを恨めしく見て家に帰ったのも今となっては良い思い出です。

それから４０年たって、国際展にも参加するフィラテリストとして、当時の記念切手に改めて触れると、欧州クラシックのような製造上のバラエティこそほとんどありませんが、消印や使用例を中心に楽しむことができる時代だったのだな、と改めて感じることができました。当時は入手手段が限られていた外信実逓便も今ではだいぶ入手できるようになりました。企画展示ですので、面白い使用例を中心に並べて見ました。当時をご存知の方は、どうぞ懐かしい日々を思い出してください。また、当時を知らない方は、なかなか展覧会でもお目にかからない昭和 50 年代前半の切手の様子をご覧ください。



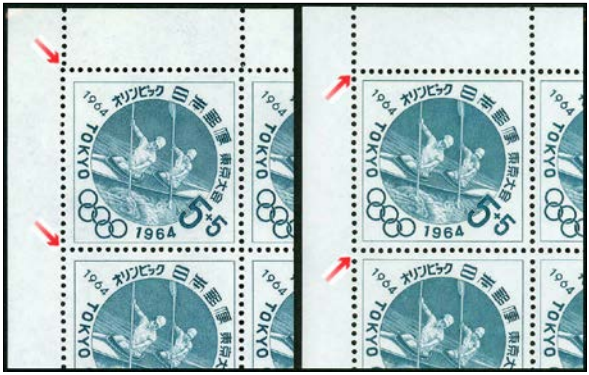
画像は、新動植物国宝切手 8 集百円の福耳付き。

昭和 30 年代記念特殊切手の製造面要素 ～目打型式とグラビアスクリーン～（5）　永吉 秀夫

原則として 1 回限りしか製造されない記念特殊切手では、製造面のバラエティは多くありません。しかし切手製造技術が急速に発展した昭和 30 年代の記念特殊切手上では、さまざまな試行と進歩の跡をたどることができます。本作品ではこれらの記念特殊切手を対象として、目打とグラビアスクリーンの楽しみ方の例を紹介します。

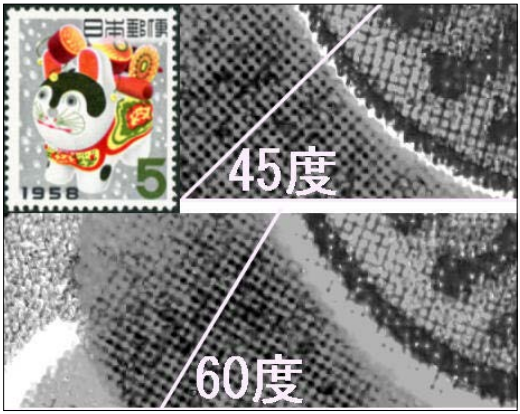
目打については、主に櫛型目打の継ぎ目や耳紙上の目打穴のパターンに焦点を当てました。目打穿孔方式の概要を説明した上で、種々のシリーズ切手を目打型式の変遷に焦点を当てて整理したコレクション例を紹介します。

例は少ないですが、東京五輪付加金つき切手のように、同種切手上に櫛型目打の向きのバラエティが見られることもあります。耳紙上に打たれた目打穴の数にバラエティのある切手も存在します。



グラビアスクリーンについては、この時期の記念特殊切手において角度のバラエティを楽しめる実例を、網羅的に紹介します。年賀切手いぬはりこの黒色スクリーンが、その一例です。

画像は、年賀切手「いぬはりこ」における黒色スクリーン角度のバラエティ (45 度、60 度)。



昭和30年代記念特殊切手の製造面要素－定常変種と目打型式による窓口シートの分類－(4)　横山 裕三

展示した記念特殊切手の製造に使用された印刷機は、当時輸入されたゲーベルグラビア多色（4色）刷輪転機であるため、印刷に用いた実用版は、円筒形で、1シート100枚の縦型通常切手の窓口シート2面分を縦に繋げた大きさでした。その版面には、記念特殊切手の窓口シート4面分を配置しましたが、普通櫛型目打と逆抜櫛型目打の場合は田型状に、連続櫛型目打の場合は横に並べて配置されました。実用版は刷色毎に製作されますので、それらの実用版に傷などの版欠点が生じた場合は、その色毎の定常変種が、刷り上がった4面のシートのどこかに現われてきます。この定常変種を基にして4面を分類し、実用版上の位置を特定することが本展示の主題です。しかし、実際の位置が特定できるのは4面の中央の耳紙にトンボが入れられた鳥ルリカケスとライチョウの2種だけで、ほかは残念ながら特定できません。そこで、目打の耳紙への抜け方を加味して、仮A、仮B、仮C、仮Dと名付けて相対的な仮の位置関係を示しました。

目打穿孔工程では、ロール紙に連続印刷されたものを、耳紙題字の有無や切手の大きさに応じて、わざわざ窓口シート大の1面又は2面に、あるいは4面に仮裁断して目打穿孔機に掛けて、最後に仕上げ裁断をしました。印刷機に目打穿孔機が直結されるようになると、印刷から直接穿孔工程に入って連続櫛型目打が穿孔され、1面ずつに裁断されて出てきました。

展示した個々のリーフには、詳細に記述しませんでしたが、1面掛けで穿孔された世界こどもの日制定記念、題字部分を背中合わせにして印刷されて2面掛けで穿孔された製鉄100年、扇の図案の原乾板を共用して作られた皇太子ご成婚の5円と20円、2面掛け穿孔と4面掛け穿孔が併存したご成婚30円と切手趣味週間雨傘、上下に目打が抜ける新型式を一時試行した鳥ルリカケス、連続櫛型目打で目打の抜け方にバラエティがある年賀竜神と辰や年中行事の七夕などが、今回展示の見どころです。また、示した定常変種の殆どは、初の公開となるものです。

年賀切手（1936-1971）（5）　　水谷 行秀

年賀切手は 1936（昭和 11）年用から始まり戦前には 1938（昭和 13）年用まで 3 回発行された。戦争のため 10 年間中断され 1949（昭和 24）年用から再開され現在に至っている。小型シートも 1936 年用は記念のため、1950 年用以降はお年玉つき年賀はがきの末等当選品として発行されている。戦前には一部で使用制限があったものの多量発行のため年賀はがき以外にも普通切手のように広く使用されている。

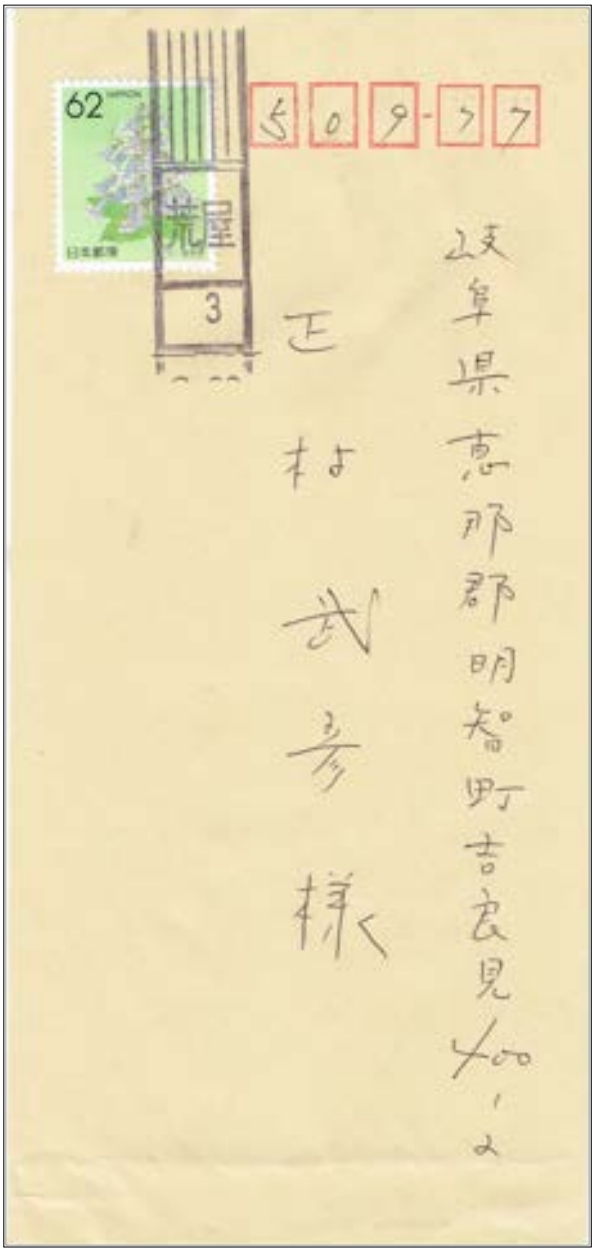
1950 年用から 1953 年用は年賀はがきの賞品が主で、一般に販売しない切手を賞品にする訳には行かないという理由で新年になってから普通シートのものを発行した。1952 用から 1966 年用のはがき 5 円時代には賞品を一般のはがき料金に合わせるため 5 円額面の切手を組み込んだ小型シートが発行された。年賀はがきは 4 円であったのに普通シートの切手も同じ 5 円額面で発行された。この間の年賀切手貼り年賀はがきが少ないのは 1 円高い年賀切手を敬遠した理由も大きい。

本作品は年賀郵便の観点ではなく、年賀切手の観点よりまとめた作品である。単片でも区別出来る普通シートと小型シートや、年代によって徐々に変わる消印のタイプそして短期間使用された試行的な消印などを取り込んだ。

1951（昭和 26）年用の年賀切手は 1 月 1 日に発行されました。そして年賀専用の図入り年賀印は前年の年賀特別取扱い期間（12 月 15 日から 28 日まで）が正規。よって画像は、1 月 1 日の発行日にこの印を使用してしまったか､前年の 12 月 28 日までに誤発売してしまったかのどちらか。

ふるさと切手　花　62円(4)

斎 享



ふるさと切手『花』62円は、平成2年4月27日に50面シートが全国で販売され、20面シートは12の郵政ごとに管内のものを販売した。

消印の色が、平成3年4月20日に黒色から錆桔梗色に変更され、櫛形印が丸型印、和文機械印が新和文機械印、欧文機械印が新欧文機械印、ローラー印が新ローラー印など変更されていった。さらに、試行印、年賀印、欧文印などがあり、日本の消印の中で最大のバラエテイの時期であった。それを『ふるさと切手花62円』の満月消印で表現した。

郵政局ごとに管内のものを販売した為、管外の地域外使用や20面シートと50面シートを区別する為のペアやブロックを展示した。

おもしろいものでは、岩手県の荒屋局は、昭和63年のローラー印6を削って、平成3年のローラー印として使用した。

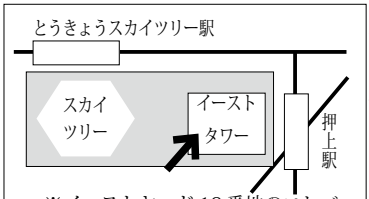
郵博 特別切手コレクション展

1902 年（明治 35 年）に開館した「郵便博物館」に その起源を遡る「郵政博物館」で開催される特別展です

２０１７年度に開催予定の特別切手コレクション展一覧

開催期間	特別展名
4/21-23	郵便制度史展 2017 ポスタル・ヒストリーのメイン・ストリームを織りなすコレクションの数々
5/13-14	沖縄本土復帰 45 年記念展 戦後 1972 年まで沖縄で独自に発行された「沖縄切手」コレクションが大集結
6/3-4	昭和切手発行 80 周年記念展 「昭和」の最高峰コレクションが揃い踏み
10/7-9	日本の記念特殊切手コレクション展 記念特殊切手の製造・発行・使用面を研究するグループの結成 10 周年記念特別展示
11/11-12	「心をつないだ年賀郵便の歩み ― そして未来へ」展 送り手の真心と郵政マンの努力の結晶「年賀郵便」の歴史を紐解く
12/9-10	第 5 回ヨーロッパ切手展 ヨーロッパ切手の本格コレクションが勢揃い
2018 年 2/3-4	第 1 回いずみ切手研究会展 わが国郵趣グループのトップ・ランナーの実力がここに明かされる
2018 年 3/3-4	安藤源成コレクション展 フィラテリー 70 余年の軌跡と名品の数々を含む円熟コレクションを一堂に

特別切手コレクション展の開催時間は原則として午前 10 時～午後 5 時半ですが、初日だけ 12 時開始になる事が多いので、ホームページでご確認の上、お越しください。



※イーストヤード 12 番地のエレベーターで 8 階まで上がり、8-10F ライフ＆カルチャー用エレベーターに乗り換え、9 階までお越しください。

郵政博物館への行き方

所在地　東京スカイツリータウン・ソラマチ 9 階
※イーストヤード 12 番地のエレベーターで 8 階まで上がり、8-10F ライフ＆カルチャー用エレベーターに乗り換え、9 階までお越しください。

最寄駅　押上駅（東京メトロ半蔵門線、都営浅草線、東武スカイツリーライン、京成押上線）、とうきょうスカイツリー駅（東武スカイツリーライン）両駅から直結。

共催　郵政博物館、特定非営利活動法人郵趣振興協会　http://kitte.com